

## シャセリオー展 19世紀フランス・ロマン主義の異才

国立西洋美術館（東京・上野公園） 2017.02.28～05.28



「テオドール・シャセリオー」(1819～1856)は、ロマン主義に属するフランスの画家で、自画像、歴史画、宗教画、寓意的な壁画等の作品が有名で、メランコリックな画風が魅力である。

画伯は11歳で古典主義の巨匠「アングル」を師にし、ロマン主義の潮流の中で師の古典主義を離れて、“独自の抒情的で情熱的な画風を模索した作品を築いた画家”として名高い。

本展では「フランス・ルーヴル美術館」の所蔵品を核として、初期から晩年までの画業を辿っている。さらに、同時に彼から影響を受けた「モロー」や「ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ」

らの象徴主義の画家を中心とする作品も合わせて「総数110点」もの絵画、素描、版画、写真などの展示を通じて、その芸術の意義を再考するという企画で、本邦では初めて本格的に彼の作品を紹介する大回顧展として展示がされている。

本展覧会は、本国フランスでも作品をまとめて見ることはきわめて稀であるとされ、「シャセリオー」の芸術に触れることのできる絶好の機会である。

### 《アポロとダフネ》 (1845年 油彩/カンヴァス)



代表作一つで腕を上げて身をくねらせた「ダフネ」の十八番の優美なポーズの作品は、主題はオウィディウス『変身物語』第1巻に記された、あまりにも有名な「アポロとダフネの物語」である。

今まさに足元から木に変わりいこうとしている「ダフネ」と悲嘆の叫びを上げる「アポロ」という劇的なクライマックスを描いていながら、この作品は“まるで時間が止まったように無音の内に凍りついており、主役の二人は美しい一つの彫像として森の中に据えられている。”

この作品は、新古典主義とロマン主義の融合から生まれたと思われるこの独特の詩情に満ちた静謐感があるとされている。